鹿　児　島　俳　諧　史

野　中　常　雄
Tuneo NONAKA

(一)

俳諧とは俳諧の連歌の略称である。この俳諧連歌は連歌の源であり，正系であつたのであるが正風連歌が起るにつれて，正系ではないという風に考えられてきて正風連歌と離れてしまつた。俳諧史の第一頁はここにはじまるといつていいであろう。和歌の余興であつた連歌が本来の滑稽的な要素を失い，法式が煩瑣となり，連歌道として厳粛味・宗教味を加えてくると，その窮屈さから解放されて，自由なものを欲するようになるのは自然である。連歌から分れたというよりも，連歌の否定として俳諧が生れたともいえるであろう。宗祇の時代のように，正風連歌が最も盛んであつた時にも，連歌師は余興として俳諧の連歌をよんだのである。しかしこれは連歌の余技以上には考えられていなかつた。

ところが山崎宗鑑が出るに及んで，はじめて全く俳諧連歌の中に没入し，また荒木田守武も千句を独吟し，俳諧が連歌と対立すべき素地をつくつた。江戸時代に入つて松永貞徳が出，西山宗因が出，芭蕉に至つて蕉風の俳諧をおこし，俳諧に真の芸術的生命を賦与したのであつた。

さて中央を遠く離れた鹿児島ではどうであつたろうか。島津義久の家老に上井覚兼という人があつた。この人の日記(註1)がのこつていて，天正二年八月四日（1574）から同十四年十月十五日まで書かれている。この中には，連歌に関する記事が相当多く出ており，その頃鹿児島における連歌がどんな様子であつたかを知ることができる。また二三例をあげると

此夜ハ誹諧などにて深行まで慰候也　　（天正十三年一月二十九日）
此晩連歌事果酒宴共也誹諧など良久被成……（天正十三年七月十一日）
誹諧雑談にて月待申候也　　（天正十四年八月二十三日）

などとあるから，連歌の余興としての俳諧も行われていたようである。

本稿では連歌の余興としての俳諧ではなく，連歌より分れた，いわゆる俳諧について述べたいと思う。しかし，管見に入つた資料も少なく，俳諧の歴史を述べるというところにまでは達していない。ただ年代順にわかつているだけを記述するに過ぎないが，一応まとめてみたいと思う。

(二)

松永貞徳門の句を類題したものでは鶏冠井令徳撰の「崑山集」と安原貞室撰の「玉海集」とがその双璧とされている。「玉海集」にとられている句は発句2620句あまり，付句580句あまり，作者658人である。その中で薩摩は大山氏以下10人，40句である。九州では肥前1人10句，豊後2人5句だけであるから，へき遠の地としては薩摩は多いのであるが，どういう事情からであつたろうか。まずこれらの句をあげてみよう。

(1) 立春　着ていはへ名に大ふくの茶の小袖
花　花の縁をむすぶの神や雨の宮
牡丹　屏風草こすは始皇か花の王
草苗　苗を植う草をとりたる田の字哉
蟬　露を呑て時雨にはくか蟬の声
瓜　ほんてんやいはばこんていこまの爪
鹿　うしならで鹿に笛吹さんろかな
薄　はらみつつ出すはすすきの発句かな
木実　四国猿のくらふやさぬき円座柿
水鳥　へら鷺てそくいひを鴛鴦の衾哉
(2) 桜鯛　花の波のうしほ煮ぞよき桜鯛
(3) 牡丹　作る詩もししのゐんふむぼたん哉
雪　花の兄にまけしあねはの松の雪
(4) 鶯　金衣朝暮御経の声や高間寺
月　さらしなの月うすの内もてりふ哉
(5) 月　宵闇は雲のはらみか月とまり
(6) 夏草　ひらき見るは文か恐々金銀花
冬月　見さい見さいさい鳥さえたもち月夜
(7) 梅　花の香や鎌倉中をむめかやつ
(8) 立春　いはふ餅は幸菱よけふのはる
(9) 月　ほを持や薄に移る月のふね
雪　ひたしろや御所の御もんの松の雪
(10) 蚊　蚊雷にましる螢やいなひかり

土筆　ひの袴きるや焼野の土筆
蝶　雪に似たる富士野の蝶や駿河舞
牡丹　富貴天に有やぼたんの花の雨
菖蒲　大和ふきの軒の菖蒲やなら刀
扇　あふき相撲とれるや風の神祭
雑夏　篝火でするや鵜飼の夜の能
相撲　つかみたをすすまふや四十八てんぐ
菊　曾我菊の淵もやとらが涙川
霰　屋根の谷にひひくは木玉あられ哉
水鳥　鉄炮にあたるなたねか鳴ちどり
木実　落ふるる身となりつねや丹波栗
雪　しのに物おもひ荷物や篠の雪
牡丹　花王植はいつくも土御門
雑秋　大臣の知行ところや稲畠
水鳥　虎ならで千里がはまや千鳥かけ
雪　大淀の雪の女松や伊勢大輔
木実　折てくふ味やよしつねゐほしかな

(1) は大山氏の句である。大山氏は名前は記されていない。句数も玉海集の作者の所には，22 句とあるが，わたくしが調べたところでは 20 句しか見当らなかつた。(2) は武林氏守泉，(3) は森村氏吉行，(4) は大坂氏政重，(5) は壱岐氏秀幸，(6) は是枝氏盛延，(7) は兼次，姓は記されてない，(8) は是枝氏快温，(9) は沢田氏朱秀，(10) は園田氏重好の句である。

貞徳は連歌はその用語に雅言を用い，俳諧は俳言（俗語・漢語）を用いるものとし，俳諧の本質は滑稽だとは考えていたが，それを内容に求めないで専ら形式の中に見出そうとした。即ち言語の技巧に滑稽を求めたのである。故事の引用・詩句の翻案・縁語掛詞の使用など修辞に力を用い，単なる言語の遊戯に終始していた。上にあげた句も貞門の句風をよく表わしている。特に薩摩の風土が感ぜられるといつたようなものはないようである。

上にあげた人達の中，快温・朱秀・重好・政重 4 人を除いては，「玉海集」以外では，これらの人達について書いたものは，まだ管見には入らない。快温については「新撰俳諧年表」（平林，大西両氏共編　1924年刊）にも出ており，「俳諧作者名寄」（朝江種寛編，寛文年中刊　俳書大系所収）にも

季吟 ― 北村氏　拾穂軒 ― 山岡元隣
― (八人略)
― 快温サツマノ住
― (四人略)

とある。また「称名墓誌」(註2)にも，

○ 柿本寺卵塔中にあり。魂屋石なり。初山伏にて周防坊と号す。寛陽公の命あり，還俗し善右ェ門と改む。御船奉行となり，吟味役兼山川地頭を給ふ。寛永十五年島原の城乗に屏を越，賊二人を討取たり。北村季吟門人，俳歌を学，俳諧師山崎宗鑑が著す新続筑波集に多く快温の句を載す。又俳諧玉海集にも載せたり。元禄八乙亥歳四月廿九日，賞権大僧都法印快篤と記す。

とある。文中に宗鑑が著す「新続筑波集」とあるが，宗鑑には「新続筑波集」の著はなく，時代も違うから，季吟の「新続犬筑波集」と思い違いをしたのであろう。「新続犬筑波集」には46ケ国，727人の句4269句がとられているが鹿児島関係では重好4句，快温9句，朱秀10句，謙也30句がある。

（三）

貞門から談林へと移つたのであるが談林系の俳人としては，鹿児島からは一人も知られていない。談林を経て蕉風が確立され，九州にもその影響はあつたのであるが，鹿児島にはどんな影響があつたか，よくわからない。ただしかし，注意すべき人に樺山釭文資茂がある。「称名墓誌」に，

○ 上山寺観音堂の後小高き所にあり。初名忠村龍右ェ門，後に五郎兵衛と称す。俳歌を好む。釭文は其俳名なり。摂津大阪に行き，芭蕉の高弟園女を師とす。本藩蕉門の俳諧釭文に始る。ある寺にて園女と面謁の時，

なにはつに梅のみこしの柳かな　　釭　文

菊のりやその名も高き国のはな　　園　女

或年京師にて二月十五日桜の花見に行きしに，寺僧集まり酒宴しけるが釭文を見て，句をせよと嘲り責ければ，短尺を出して，

はなもちれけふは衣更著十五日　　釭　文

と書き，枝につけたりしに，衆僧みて大に赤面し，ひとり二人づつ立去れるとぞ。元禄十四年辛巳十月五日代官役となる。同十六年喜界島代官に渡海す。（中略）享保二年酉六月十六日老を告け釭文と更む。同十三年戊申七月廿七日年七十七，無章釭文居士，右脇に樺山釭文資茂と記す。

とある。釭文の事は「新撰俳諧年表」にも出ており，「四国・九州俳諧史」（俳句講座第10巻所収、亀田小蛄氏）にも鹿児島の事にも2頁ぐらい触れているが，その大部分は釭文の事に費している。これは「称名墓誌」をもとにして書いているようである。鹿児島における蕉風は，今のところ，この程度にしかわかつていない。

この頃珍重という人があつた。「称名墓誌」に，

○ 今井八右ェ門良寛，松原山洲崎茶毘場の西卵塔中にあり。俳歌を学び俳名を珍重と云ふ。延享四丁卯十月初九日仙梅堂傑山英居士，辞世

水に絵をかくのことくや歳暮ぬ

又遺言して田上村悟性寺馬頭観音堂の後に逆石を建て，前面に仙梅堂，右脇に天十月九日と記せり。

賢人の手油もなしことし竹

人買の鞭切音や秋の竹

鶏の息もけむるや今朝の霜

また翠柏・琴蜂等があつた。「称名墓誌」に，

○ 波江野次右ェ門通元，松原山実性院の右脇七八間許り卵塔中にあり。下町の市人なり俳歌を好み伊勢の安楽坊に入る。俳名を聴松軒翠柏と云ふ。明和三丙戌七月十有五日，翠柏通寿居士

渋柿やひあたる枝のふくれ鳩

○ 瀬戸山琴峰，不断光院卵塔中光明寺の垣涯四間許にあり。正観音の石像なり。本府上町市人にして，金左ェ門藤原安貞と云ふ。俳歌を好み琴峰は俳名なり。業を芭蕉門人浪華の野坡に受，後肥後の三雅に行く。明和八年辛卯六月廿三日，年八十，松直軒是実真相居士，観世音蓮台の下に太鼓の如き円なる石を設け．法号を記し，左に姓名，右に忌日を記す。後に文あり。平生観音を信じ，法華を読誦す，よて円通大士の像を安んじ百年の後，躬葬られん事を自ら記し置く，明和四年丁亥八月彼岸の事なり。

何古木花なき枝も桜の曲　　春雨や鞍にぬくる野山の日
なにしらぬこころも澄り川祓　　栗栖野や月を咎る犬の声
夏柴に見するや沖の初時雨　　雪触て軒をまはるや深山鳥

大阪に於て無実の罪に遭ひ御用ありし時，古狸の子の糸巳にかかりてばたつくも一興にや　　人突ん牛も角挽師走かな
と戸口を出るとて，　　くそ犬のもとに帰るや雪の道

「俳句碑巡礼」(俳句講座第七巻所収，西村燕々氏) に「鹿児島に無尽塚」(琴峰建) とある。今鹿児島市にある南州寺の門をはいると，右側に一つの塚がある。正面に「芭蕉翁」裏面に「明和七年彼岸日」と刻してある。一番下の台石に「祖翁今歳二百年の遠忌に当る。然るに墳墓是まで南林寺子安道の処今般相国寺に移し奉る。以て長く翁の遺風を仰がんことを垂望す明治廿一年十月十二日旭莽楳山門人」とある。明治廿六年が二百回忌に当るのであるが，この頃は各地で二百回忌が取越して行われたようであるから，ここでも取越して行つたのであろう。相国寺といつたのは南州寺が臨済宗相国寺派に属する寺であるからであろう。明和七年は琴峰の歿する前年に当り，年代的にも矛盾はないようである。最初琴峰が建てたのを，明治になつて，今の位置に移したのであろう。

上にあげた句だけでは琴峰の句はすぐれているとは言えない。しかし禅枝・柴車・窓巴等の弟子があり，指導者として栄えていたのではなかろうか。「称名墓誌」に，

○ 山沢禅枝，松原山実性院の東卵塔中先塋の側に在り。諱盛容五右ェ門と称す。俳諧を好み業を琴峰に受く。禅枝は俳名なり。仕て御供目附となり，小十人頭に至る。致仕告老，寛政七年乙卯十二月廿三日簑虫庵鉄梅禅枝居士，年七十二，著す所の麦薬笠都廻花屋帳三虚蔵の道記等家に蔵む。

麦の穂のうなたれ笠や供揃　　(慈眼公御髪鬢高野御登山御供して鹿児府を立しとき)
香のぬけぬ梅よ八百五十年　　(宰府天満宮八百五十年法楽)
壁に向はたのき耳なし古頭巾　　(寛政七年の冬十月和田助堅禅枝の真像を写時に自讃)

○ 伊東助左ェ門藤原清風，田之浦良英寺にあり。琴峰門人俳歌を学び俳名を柴車と云ふ。文化元年甲子十二月五日，徳峯院柴車遊仙居士，行年六十九。

○ 相良窓巴，浄光明寺塔頭東海院にあり。五輪石なり。上町市人にて休右ェ門と称す。俳諧を好み，琴峰門人，窓巴は俳名なり。文化四卯年六月廿日梅暁舎周阿窓巴居士。

辞世　たまたまの月にみしかき夜なりけり
七夕　七夕や我白毛にも露のうく

(四)

鹿児島城下だけでなく，地方でも次第に行われるようになつたようである。出水に大根塚というのがある。同町杉本寺の境内にあつたのであるが同寺は廃寺となり，今は土木出張所になつている。塚は出張所の松の木の下に苔むしている。正面の中央に「芭蕉翁」向つて右に「鞍つぼに小坊主の

るや大根引」の句を，左に「遊行五十三世他阿尊如上人」と刻し，裏面には

芭蕉翁逝後正百年矣。建碑於薩出水町杉本精舎之浄域，翁之行状人皆所知，故唯刻芭蕉翁三字，以代碑文。書之者誰。遊行五十三世他阿尊如上人所筆也。誰作是。挙郡之俳客立蘇也。誰協其力。其友春〇也。嗚呼翁之風韻古之遺愛俳諧其緒余猶為者，流之宗師嘖々尊奉百年如一日。期其永久何矣。斯石然欲見其道之及乎。遠則西海之浜亦有斯石。立蘇遙来請記其事。其尊師之厚，信道之深，雖曰未学吾固信矣。故悦而誌之。

寛政五癸丑冬　　賀　山　伯　章　撰

賀山伯章は鹿児島の人で，学を以て島津氏に仕えた人である。「俳句碑巡礼」にこの碑を「春扈建」とあるのは誤りで，建てたのは立蘇（りゅうそ）で，春扈は協力者であつた。立蘇は坂井林右ヱ門という出水の市人で俳諧をよくした。師承関係は不明である。享和二年66才で歿している。「出水風土誌」（大正四年刊 中村一正著）に

俳人立蘇は風流界に名高く，或時久しく廻国して家に帰りしに，さしもに時めきし家も蔵も皆人手に渡り屋敷跡には折しも茄子の花盛りなりしが，低徊良久しうせし立蘇矢立を取つてすらすらと書き記せしを見るに

世は夢よ茄子に変る蔵の跡

と詠み，又市来村にて雅会あるを聞伝へ，会に臨み強いて加会を願ひしに漸其末席を許されぬ，然りと雖も垢着き汚れし乞食坊主の風体なれば列座の人々皆軽侮の眼を以て之を迎へたり，然るに耻しなからと差出せし料紙には

簑虫もよもぎにつれて床の上

とあるを見て二度吃驚の声を後に飄然として立去れり

とある。このほかには句は遺つていない。

「諸国翁墳記」に「翁塚　物云へば唇寒し秋の風　谷山慈眼寺内　由光・乙彦・卓堂・巴雪・其志」とある。わたくしは何度も行つて調べてみるが，まだ見当らない，建碑の年代もはつきりしないが，こうして各地に芭蕉碑が建てられ，句会も催されるようになつたようである。

（五）

加治木町本誓寺墓地に千鳥庵水巴の墓がある。黒川山に向つて建てられ，高さ四尺程もあろうか，正面に「音誉妙観大姉」，右側に「文化二乙丑年正月十五日」と歿年を，左側に「賦命六十四，誹名水巴，立山善兵衛，養母」と四行に書かれている。享年は「称名墓誌」には44とあるが，この64が正しいであろう。「称名墓誌」に

加治木の市人立山長兵衛女なり。向江町に嫁す。名は美江という娶女にして，三味線を弾じ，又俳歌を好み，伊勢の春渚を師とす。初め洋々園水巴といえり。後に武州の俳人玉司来りて千鳥の句を聞て，千鳥庵の号を与う云々

とある。水巴の俳歴や春渚を師とした因縁，玉司との関係なども調べてみたがまだ何等の手がかりも得ていない。句も「称名墓誌」に

干潟にも白波立る千鳥かな

明月やつるべの水もすてられず

加治木船手にて於千万君三味線を聴き給いし時，命に応じて一句奉る

雲の上に声はつかしき蛙かな

紅葉せぬ山も秋なり鹿の声

本誓寺墓地を歩いていると森山則房（天明八年歿）という人の墓があり，傍に追善句碑があつて，水巴・仙華・知遊・石蔦らの句が刻まれていた。

○○時に散るさへおしき紅葉かな　　水巴

わたくしが知り得た水巴の句は以上の5句に過ぎない。これだけで見ると水巴の句は，わかり易い句であり，見立てが気がきいている。いわゆる俗受けのする句風のようである。水巴の墓の右側に追悼句碑が建つている。

水巴先姉ハ花吹風に乗じ去て○早七七の日数にあへ里兼て交り乃連中石燈○を築き句を書しるし風雅○○法界追善供養をなせり嗚呼世の聞へもなを睦しからぬや霊光眛からずは難波津のあしきを撫志のあはれなるを請ふものならし

人いづこ梅は垣根にありながら　　琴松

正面上段に

春の日にみしかき花の粧ひかな	龍夢	落るともくちぬその名や玉椿	菊露
いつのまに消えしものかは春の雪	五岳	しらぶればその名ゆかしや鞍草	一蝶
蝶も来て遊ぶ○なし花の庭	五風	ちる華や梢に残る春の月	鈴笑
心なき風の誘いし桜か南	新水	切れいかや風に引れて西の空	佳遊
散る花や惜しき昨日も一むかし	雀水	雪消えて野川にたまる行衛かな	野竹

正面下段には

散路に名を残しけりよしの山	歌柳	けふや明日と長閑待しに春寒し	五井
ちる梅やおもひ廻せとかぜそよぐ	石蔦	花と散る路にも道の光か南	芳志
散梅や木陰はいとど春寒し	惟中	月陰は松に残して雪解かな	雲鳥
風止んで勿体なしやいか巾	琴鳳	羽も垂れて鳥もおどろく花の雨	放中
琴箱にもたれかかりて温槃(涅槃か)かな	月照	鶯の羽で掃く塵や塚の前	常巴

左側に

かの峯にさりとはあたらちり桜	鹿府和水	無常とは誰初ぞ散さくら	怡松

以上23句が美しい筆蹟で刻まれている。ここに名を連ねている俳人23人は，和水が鹿府と肩書してあるだけであるから，他は皆加治木の人であつたと見ていいであろう。水巴らの存在は加治木地方に俳句をひろめることとなつたのであろうが，詳しい事がわからなくて残念である。

「類題発句集」（安永三年1774）には

干飯や雀ささやく軒の妻	サツマ谿々	木瓜の実やとられましとて針の中	サツマ斐文
茸狩や物落したる人の顔	サツマ三桃	三日月の後もしらけす星月夜	大隅雲道

が出ており，「新類題発句集」（寛政元年1789年）にも

三寸に髪あらたまる蓐かな	大隈凉石	老が目に始は太しはつ暦	さつま秀山
鶏の尾を別ちけり春の風	さつま翁草	淡雪に御注連の竹の青さかな	さつま立成
焼野原松一本の青さかな	さつま楓居	山吹や洗ひし絹について居る	さつま桃牛
暑さます入日や桐の葉の光	さつま達而	丸いのは都の山や雲の峰	さつま扇風
簗山や五月躑躅に雨のくも	大隅戯蝶	夏引のいとしき母の手業かな	大隅有朗
をとり子や立並びたる袖の波	さつま巨谷	露ともにそのまま落ちし一葉かな	さつま山加

蜩の宿りもかへぬ一末哉	さつま筒水	初鴨や刈らぬ水田に波を立て	大隅雲道
木枯に背中おされて行く野哉	サツマ玉包	あけがたや鴨の首出す田のくぼみ	サツマ達辞
夬すぎし遊女まねかむ後の月	サツマ非丘		

らの句が出ている。句には何の新しさも感じられないが，俳人が相当ふえてきたことを物語つている。

(六)

「俳諧発句題叢」(文政三年1820年刊，青野太笞編)には宝暦頃から当時までの俳人2072人の発句を類題的に編してある。作者は対馬・八丈島にまでわたつており，当時の俳人の分布をも知ることができる。鹿児島は薩摩が8人，大隅が1人はいつている。(なお九州では筑前49人，筑後17人，豊前17人，豊後29人肥前38人，肥後14人，日向3人，壱岐1人，対馬8人となつている。)谿々・三桃・斐文・雲道の句が1句ずつ出ているが「類題発句集」に出ていたのと同じ句である。

貰はれつ貰ひつ梅の世なりけり	龍門司	鶯と其日其日の遊哉	龍門司
帰る雁浪どこまで行事ぞ	〃	春雨やいつ引くとなく夜の汐	〃
伐れ伐れと人はいふなり木下闇	〃	年寄れと糞をかけたり子規	〃
生れしもこの小筵ぞ冬木立	〃	梅の花物あらはなる気色かな	琴州
梅が香や嵐こぼるる桶の水	青梁	凩や月の表か松の声	只冬
脊鴒や朝起鳥よ霜の上	巴水		

鹿児島は九州でも多い方ではないが次第に行われるようになたことを示している。なお「新撰俳諧年表」には，龍門司・其鹿・桃戴・月窓・有中などの名が出ている。

市営バス常盤終点から10分も行くと鹿児島市武岡に「桃岡八田先生幽栖之地」と書かれた大きな碑がある。すぐその近くに高さ3尺直径1尺ほどの碑があつて，円柱の正面には，

撓みては雪まつ　　ばせをの翁
竹の気しき哉

裏面には「天保九年戊戌十月十二日」と刻してある。この句碑の事は「芭蕉塚」(昭和十八年刊出口対石著)にも出ている。碑の横に石燈ろうがあつて，48人の俳人の名が記されている。

正面　山骨・水月・知水・立龍・得鶯・薗之・呂交・立正・懐玉・水哉・雨橘・琴雪・素秋・宜水・応門・朶山

右側　冬扇・亀子・桃言・立水・朗冬・吸月・蓬笠・紅楓・仙○・月宗・洞魚・錦笑・芦角・石水・杉水・桐葉

左側　菓得・風船・禾山・○○・岩水・杜○・○○・桃中・蘇門・其蝶・李井・其青・禾村・塊菴・琴船・楓青　吟徒

亀田小蛤氏は「四国・九州俳諧史」の中で，

由来さつまの国是として，他国人の入り難く随つて俳諧人も少きは当然であるが嘉永頃の版本を見ても，大隅では

左右之　高山　石川氏，柏邑　同　柏原氏

とあるに対し，さつまはただ

風章　蔵戸上町　原田氏

という比較にもならぬほどであつた。

と言つているが，これは先にあげた例を見てもわかるように亀田氏の誤解である。両国とも島津藩であつたから同じ条件のもとに考えなければならないし，事実どちらがどうという事はなく，同じような進み方をしている。奄美大島でもこのほど文化六年十二月建立の蕉芭句碑（春立ちてまだ九日の野山かな）が発見されたという事であるが（昭和廿九年八月廿五日の南日本新聞による）近世末に於ては鹿児島地方でも俳句をたしなむ人が相当ふえたようである。

また本誓寺墓地には明治八年に歿した原田嘉右ヱ門の墓がある。墓碑の左側から背面にかけて楽水・風骨・一葉ら26人の追悼の句ならびに半歌仙が刻まれている。俳諧がさかんに行われていた事を知り得るが，これらについては後にゆずることにする。俳諧史という論題にそむいて，ただ管見に入つた材料の羅列に終つたが，ここで明治以前を一応終ることにする。

（註1）上井覚兼日記は島津義久の加判役であつた上井伊勢守覚兼の日記で，天正二年八月四日（1574年）より天正十四年十月十五日まで書かれている。この間，四年九月六日より十一年十一月三日までは全く欠けている。記事は後の方が精細になつている。公私にわたつて記してあり，即ち芸能連歌等についても記してあるので，その方の参考にもなる。お能等については，この日記をもととして，森末義彰氏が「薩南の芸能」（「国語と国文学」昭昭十九年十一月）と題して論じておられる。今度東京大学史科編纂所編で，岩波書店から上巻が出版された。わたくしが参考したのは旧玉里文庫から移した鹿児島大学図書館所蔵の写本であつた。

（註2）称名墓誌は本田親孚の著で正編3巻と備考1巻とから成つている。備考には伊地知季彬（後に季安と改む）の補遺が附してある。薩藩内のもろもろの寺地山野に遺つている塚墓を探討し，貴となく賤となく徳を成し材を達し，よろずに名を称する事のあるものを集め，いろは順に分別し，その略伝を記述した書である。備考は親孚が「凡そ名もあり墓もあり正集に入るべくして其所を見ず．或は名あり墓なく．考に拠るなき者あり。為に備考1巻を作る。」といつているのによつて明かであるが，親孚が稿を起したのは文化甲戌（11年）の秋であつたが丙子（13年）の冬，54才で捜訪博採の途でにわかに歿したので，季安が補つたのが補遺の部分である。伝写によつて人員には多少があるらしいが，「薩藩叢書」第4編（明治42年刊）中の「称名墓誌」には正編に484人，備考に169人，補遺に256人のしてある。本稿はこれによつた。

参　考　文　献

1．上井　覚兼　上井覚兼日記
2．本田　親孚　称名墓誌（薩藩叢書第4編の中）
3．亀田　小蛄　四国，九州俳諧史（俳句講座第10巻の中）
4，西村　燕々　俳句碑巡礼（俳句講座第7巻の中）
5．出口　対石　芭蕉塚
6．野中　常雄　俳人千鳥庵水巴と原田嘉右ヱ門とについて（鹿大教育学部，研究紀要．第3巻）
7．その他鹿児島県下の風土誌・郷土史

—1954・9・26—